

地域を題材とした探究学習が 生徒の地域への愛着に与える影響

要旨

氏名：日下部結人

本研究は、2018年の学習指導要領改訂により高等学校で必修化された「総合的な探究の時間」において行われる、地域を題材とした探究学習が、生徒の地域への愛着やUターン意向に影響を与えると仮定し、これを明らかにすることを目的としている。このプロセスを示すことができれば、教育が地域活性化の一助となる可能性を示すことができるが、その客観的な効果を定量的に検証した研究は未だ少ない。

本研究では、2014年度より地域を題材とした探究学習「探究飛驒」を行っている私立高山西高等学校を事例として、学習当事者である生徒へのアンケート調査、授業発案者である教師へのインタビュー調査を行った。

アンケート調査では、探究学習実施前の高校1年生、探究学習実施中の高校2年生、探究学習実施後の高校3年生の回答を比較し、その変化に着目した。その結果、地域を題材とした探究学習だけでは、生徒の地域への愛着が高まるとはいえず、今回の調査からは仮説を示すことはできなかった。一方、地域への愛着が強いほど積極的なUターン意向を持つこと、生徒たちが大学生との交流の場などの探究学習の副産物的な役割を肯定的に捉えていることが明らかになった。

インタビュー調査では、アンケート調査の結果をもとにしながら、授業設計当時に込められた理念等が、現在の生徒の心境に表れているのかを明らかにす

ることを目指した。その結果、地域を題材とした探究学習を行う理由の 1 つに、地域への愛着を高め、将来的な U ターンの推進になればという考えがあったこと、探究学習の副産物的な役割が授業発案当時から計画されていたことが明らかになった。

これらを総合すると、当初の仮説は全体として成立しなかった一方、地域を題材とした探究学習自体は、生徒、教師の双方から肯定的に評価されていた。

今回の調査結果から考えれば、生徒は、副産物的な役割を動機づけとして地域を題材とした探究学習に取り組むことで、地域に対して興味を持つ。この興味や意欲を U ターン意向に結び付けるためには、地域への抽象的な思いを具体的にする必要はある。このためには、U ターンを行った際の具体的な役割や活動を自治体側が明確に示すことが必要不可欠であると考えられる。

一方、1 年間という研究期間の制約もあり、本研究には、パネルデータが取得できなかった等の複数の技術的課題が存在した。これらの課題を踏まえ、今後より正確な分析を行いたいと考えている。